

北海道大学公共政策大学院公開セミナー

留学生が語る北海道の魅力と可能性

グローバル化の中で、留学生が北海道をテーマに研究する時代がきています。2014年1月11日、北海道大学公共政策大学院は、公開セミナー「留学生が語る北海道の魅力と可能性」を開催。北海道大学で学ぶ三人の留学生が、北海道の魅力と可能性の再発見に挑み、戦後の北海道開発政策などを国際比較の視点から検討した内容を報告し、議論を深めました。

報 告

北海道開発の知恵を故郷の発展に

北京科学技術大学4年生の2011年10月に北海道大学に初めて留学、一度北京に戻って大学を卒業し、13年4月に改めて公共政策大学院に入学しました。私は北海道に「呼ばれた」と思っています。大学に入学した08年には、中国では北海道でロケが行われた映画『狙った恋の落とし方』が大ヒットしました。その映画で初めて北海道を知り、広大で美しい風景に感動して、いつか必ず北海道に行くという夢が芽生えました。東北大学という選択肢もありましたが、私は迷わず北大を選びました。

北大で北海道の魅力を再発見したのは、小磯先生の授業です。大学院入学前は社会保障に関心を持っていましたが、先輩のアドバイスで小磯先生が担当している北海道開発の授業を受けました。戦後の荒れ果てた中でどんな政策を展開し、発展してきたかを知ることができました。自然に恵まれている一方、寒冷地という不利な条件がありながら、研究者や行政、住民の知恵と努力でさまざまな困難を乗り越えてきた北海道は非常に魅力的です。特に、授業で学んだ地域産業の考



ソ イッセイ 蘇 聿醒 さん
北海道大学公共政策大学院1年

え方が、私の故郷に応用できると感じています。

私の故郷は、山西省の東南部、晋城市に所属する陵川県で、面積は1,751km²、人口は約25万人。そのうち農業経営人口は約23万人です。山が多く、棚田のような形状で、土壌浸食をよく起こします。それでも食料収穫量は努力の積み重ねで徐々に向上し、実用的な技術開発も進んでいます。しかし、耕地面積の減少と人口増加のため、バランスが取れなくなってきています。生産物の付加価値を上げる研究は少なく、機械化も進まず、大量生産には結びついていません。でも、工場を誘致して環境を犠牲にする産業振興は持続的ではないと思っていました。そこで、関心を持ったのが、小磯先生が提唱されている「産消協働」です。生産者と消費者が連携を取りながら、地域の人材や資源をできるだけ域内で消費、活用し、自力で地域の経済力を高めて産業おこしや雇用創出につなげていくという地域主体の産業政策です。

陵川県は近隣の地域よりも平均気温が低いのですが、漢方薬や胡桃、キクラゲなど、付加価値が高い植物の生育に適しています。山地特有の条件を利用すれば、新たな付加価値も発見できるでしょう。また、私は地元住民の温厚篤実な性格に誇りを持っています。今までは生産者と消費者が連携する場がなく、域内の循環力を上げることはできませんでしたが、その性格から信頼を築く意義は重要で、産消協働の実践で新たな付加価値を創造できれば、強い信頼関係で結ばれます。

帰国後は公務員になって、仕事の中で故郷が発展するアイデアを実行したいと思います。目標は、故郷の開発と住民の暮らしの改善です。長く険しい道ですが、親切に指導していただいている先生方の励ましと、北海道開発の知恵を活用し、初心を忘れずに頑張りたいと思っています。

北海道の魅力発信を「道の駅」や「物語」で

私は2005年から韓国の国土交通省に勤めています。韓国でも地域開発や財政など、いろいろな問題を抱えており、地域問題や地域開発政策を学ぶように命じられて13年秋に札幌にやってきました。北大を選んだ理由は、優秀な大学でいい教授陣に恵まれているということもありますが、北海道を気に入ったからです。



ユン サンアン 尹 相勳 さん
北海道大学公共政策大学院1年

皆さんはドラマや映画で韓国について知ることがあると思いますが、私も北海道を知ったのは岩井俊二監督の映画『ラブレター』でした。あの映画で北海道の魅力を感じ、今は地域開発や地域産業政策について研究しています。

私が北海道に関心を持ったのは、「道の駅」です。韓国にも現地の農畜産物を販売する場がありますが、道の駅のような生産者個人の特色や鮮度が強調される地域内の流通システムはありません。北海道は道外への一次生産物の食料供給地として位置付けられる傾向がありますが、地域住民のための消費地の役割も大きいと思います。昨秋に滝川市を訪問して道の駅を知りましたが、最近もたびたび訪問して特産物を買ってきます。道の駅は生産と消費のシステムとともに、地域住民の情報交換の場、外部の訪問客を誘引する場としての役割を備えていて、北海道の長所を極大化できる場所だと思います。

砂川市のハイウェイオアシスやすながわスイートロードも訪問しました。空知はあまり観光地として知られていないようですが、滝川市の丸加高原はルスツ高原と同じくらい魅力を感じましたし、スイートロードで食べたアップルパイも札幌の専門店に負けない味で、北海道らしい絶景と食べ物は日本国内や外国と比べても誇れると思います。外国人に知られていない地域でも、個性を生かせばポテンシャルがあるので、外の人たちに知らせようとする努力が大事だと思います。

北海道で一番驚いたのは、韓国より深い歴史があるように見えた点です。単なる歴史ではなく、その地域

だけの物語や香りが感じられるということです。北海道の紹介本やチラシには、函館物語や十勝物語など、「物語」という言葉がよく見られます。歴史が浅いので、北海道を訪れる人に聞かせる歴史が少ないために、人工的な物語が作られるしかなかったのかもしれませんが、外国人は実際の歴史よりウェルメイド^{*1}の物語の方が、神秘的で感動的に感じられます。小樽市の歴史的な建築物、石造り倉庫、運河などは浪漫的で幻想的なイメージを引き出している名所ですし、登別の温泉や歴史、閻魔伝説、鬼の公園も情感のある地域イメージを形成しています。

最後に、北海道と済州島^{チュジュド}を比較してみます。済州島は朝鮮半島の最南端にあり、中心都市は西帰浦^{ソギョプ}です。面積は、北海道の約15分の1で人口は60万人。韓国では首都圏への人口集中と人口増加率の下落が見られていますが、済州島は人口が増え続けており、20年頃には70万人を超えると予測されています。その背景に、02年から政府が本格的に進めている特別自治道及び国際自由都市の推進があります。済州島は韓国唯一の特別自治道で、北海道は日本唯一の道です。地理的にも韓国最南端と日本最北端で、産業も農業が中心など、似ている点が多く、それぞれの発展性を研究することは有意義だと思います。済州島には02年に制定された「済州島特別自治道設置及び国際自由都市造成のための特別法」があり、中央行政機関の権限移譲と規制緩和、特例などを通じて、自治事務の拡大が進められています。13年までに3,000件を超える中央政府の権限が移譲され、自立的な財政のために観光三法といわれる、観光の中心的な法律に関連した権限も移譲されています。特別自治道は北海道と異なる点も多いと思いますが、地域の自立的な発展の方向性など、参考になる点も多いと思います。



^{*1} ウェルメイド (wellmade)
恰好のいい、巧妙に作られた。

図書館、新聞、市民グループなど豊富な歴史情報



ジョナサン・ブルさん
北海道大学法学研究科
博士課程

私は、日本の帝国崩壊後の人口移動、いわゆる引揚者について研究しています。日本には大学卒業後に「JETプログラム^{※2}」の英語の指導助手としてやってきて、枝幸町の小学校と中学校で英語を教えていたが、枝幸町に住んだことで研究テーマを見つけることができました。

戦前の北海道は樺太との関係が非常に強く、稚内、浜頓別、枝幸、雄武、興部などに樺太から引き揚げてきた人たちが住んでいます。枝幸町で英会話クラスを通じて大人たちとも知り合い、引揚者のことを知り、面白い研究テーマになると思いました。イギリスの大学では政治経済が専攻でしたが、日本から帰国後、大学院で日本について学び、再来日することになって北大を選びました。研究テーマが見えていたので、北大は最も適した大学でした。

枝幸町では1945年頃に約6,000人だった人口が、49年には約9,000人になっています。北海道と九州は引揚者の受け皿として重要な役割を果たしたと思います。ヨーロッパではイギリス、フランス、オランダなどが帝国崩壊を経験していますが、植民地に住んでいた人々が自国に戻ってくることについての研究があります。日本は約600万人という大きな人口移動があったのに、関連する研究が少なく、引揚者に関する歴史への無関心さを感じます。私の論文では、45～70年に引揚者についてのストーリーが語れるようになり、70年以降は引揚者という歴史観が一般化したということ論じています。その中で重要なのは樺太引揚者のイメージづくりで、北海道の場合は政治家や官僚の協力関係が重要な役割を果たしたと思っています。

研究の過程では、道立図書館や文書館、市町村の図書館、図書館職員の情報が大変役に立ちました。昔からの地元新聞や市町村史からも多くの情報を得られました。また、北大の先生たちが持つネットワークの広さにも助けられました。例えば、稚内の調査では、山崎先生が知り合いを紹介してくれましたし、北大にあ

るサハリン関連の研究グループも心強い存在でした。北海道にはローカルヒストリーを学ぶ市民グループも非常に多く、その情報を得ることができたことも北海道で学んでよかったと思う点です。北海道で研究することで、北海道と東京の距離感も理解できるようになりました。また、その距離感は日本の歴史の中でも重要なポイントだと考えています。

最後に、戦後北海道と樺太との関係は薄れてきましたが、戦前は非常に重要な関係にあり、終戦直後も引揚者が北海道に入ってきたことで、北海道として重要な役割を果たしたと考えています。それは北海道にしなければ発見できなかったと思っています。

留学生の発表を聞いて

山崎 北海道の大学教育は、まだまだグローバル化していません。留学生は増えていますが、留学生の出身国も多様になっていますが、他府県の大学との比較ではまだ少ないのが現状です。

今日は三人の学生から北海道の魅力や可能性をそれぞれの研究に即してお話いただきましたが、北海道には潜在的な可能性がいろいろあると感じました。ただ、課題はいかに顕在化させていくかだと思います。

私は、国土開発政策や北海道開発政策を研究してきましたが、北海道は東アジアの中でのアドバンテージがあります。最近改めて主張されているのが、エアラインの航空路や船舶の航路です。地球儀を北から眺めると、北海道はアジアと北米、アジアとヨーロッパの結節点にあり、地理的に優位です。そうした潜在力をどのように生かしていくのが、北海道を発展させるポイントになっていくと思います。

また、学生たちの話を聞いて、われわれは北海道の魅力や、また大学としては研究の魅力を発信していかなければならないことを感じました。8年前に小磯先生と一緒に『戦後北海道開発の軌跡』という本をまとめる機会がありました。戦後の北海道開発を年表で整



山崎 幹根
北海道大学公共政策大
学院院長

※2 JETプログラム

「語学指導等を行う外国青年招致事業」(The Japan Exchange and Teaching Programme) の略称。総務省、外務省、文部科学省及び財団法人自治体国際化協会の協力のもと、地方公共団体が実施している事業。

理するとともに、北海道開発政策のいくつかの論点について小磯先生と対談形式でまとめたもので、留学生が参加する授業でも教材として使っていますし、世界中からやってくる客員研究員や表敬訪問して下さる方にも差し上げています。これからは、このような情報を中国語、韓国語、英語で翻訳して発信していくことが大切で、北海道学、北海道スタディーズというものをつくり上げて、発信していかなければならないと感じています。そして、世界の学生たちや研究者の皆さんが、北海道大学で学びたいと思うような要素を磨いて発信していくことが大切だと感じました。



柿澤 未知
北海道大学公共政策大学院准教授

柿澤 未知
北海道大学公共政策大学院准教授

柿澤 私は外務省で国際交流、外交にかかわってきました。特に、中国、台湾との関係については長年にわたって担当しており、北京と台北の駐在経験もあるので、それらの経験を踏まえてコメントさせていただきます。

今の大きな時代の流れで重要なのはグローバル化です。グローバル化というと、北海道ではTPPや産業の空洞化、競争の激化など、ネガティブな要素が目につくのかもしれません。でも、外交や国際関係にかかわっていると、その流れが不可避になっていく中でどうやって日本が生き残っていくかを一緒に考えていかなければならないと思っています。日本、そして北海道が生き残っていくためには、蘇さんのお話にあったように付加価値をいかに高めていくかということと多様性が重要です。国際社会の中で同じものを作っても価格競争の中に巻き込まれるだけです。北海道にしかできないもの、北海道人にしか作り出せないものをいかに作っていくかが大切です。加えて、重要なのが発信力で、パッケージングや売り方などのマーケティング能力です。北海道は、中国、台湾、香港や東南アジアに対して非常に強いブランド力を持っています。最近の日本政策投資銀行の調査によると、東南アジアでの北海道の認知度は京都よりも上で、富士山、東京に次いで高くなっています。その要素は、雪国の魅力や夏のラベンダー、広大な自然です。それに加えて、日本の清潔さや安全、

安心ということが全体のブランド力につながっています。私は、その根底にあるのが信頼だと思っています。その点で残念なのが、最近のJR北海道のような、信頼を損なう事案です。信頼を欠く情報が出てくると、海外にもイメージがつかってしまうので、北海道として信頼性をどうやって維持していくかは重要な課題です。

潜在的な親日家は確実にアジアで育ってきています。その潜在的なニーズを拾い上げていくには、それぞれの言語による発信が不可欠です。先ほど留学生二人から映画の話題が出ましたが、文化を通じた発信力はあなどれません。映画などのメディアを通じた発信は、政府も含めて取り組んでいくべきだと思っています。

小磯 公共政策大学院のミッションの一つに、異なる分野を学際的、領域的に融合させて新しい研究を深めていくということがあります。その一例がグローバル化とローカリズムを融合させて、新しい政策研究を進めていくグローバル・プロジェクトですが、本日のセミナーはその一環で、まさにそのテーマに沿った話題が3人から発表されたと感じました。



小磯 修二
北海道大学公共政策大学院特任教授

蘇さんは、私が提唱している「産消協働」のメッセージを受け止めてくれたわけですが、まだ北海道でもこれからの分野で、それを今後どのように発展させていくのかということを改めて考える機会になりました。また、尹さんのお話では、韓国の中での特別な地域という意味で、濟州島の話題に興味を持ちました。北海道の戦前戦後を通じた開発政策の中で、韓国の特定地域開発や発展にどのような点が応用できるのか、改めて考えてみたいと思いました。ブルさんのお話では、戦争で多くの植民地を失った日本が、引揚者に対してどのような政策で向き合ったのか、また、北海道が果たしてきた役割をどのように感じているのか、改めて聞いてみたいと思いました。今日のセミナーは日ごろ教えている学生から学ぶことの多い貴重な機会でした。